

第1回四国女性研究者フォーラム開催報告

香川大学主催「第1回四国女性研究者フォーラム」を徳島・鳴門・高知・愛媛大学の共催で、平成23年2月23日かがわ国際会議場において開催した。参加者は91名(学内43名学外48名)、内女性58名、男性33名。

1. 開 会

一井学長の開会の挨拶。日本で初めての女性博士を生んだ香川県が、第1回四国女性研究者フォーラムを開催する意義、地域に根ざした大学、四国地域の構成員として、四国全体で優秀な女性研究者の育成に取り組む意気込みを語った。

来賓挨拶として、香川県知事に代わり香川県総務部次長県民活動・男女共同参画課長 広瀬義文氏が代読。第3期男女共同参画基本計画の学術分野の課題において、女性研究者の積極的な登用が求められていることに言及した。

続いて、文部科学省 技術・学術政策局 基盤政策課長 板倉周一郎氏よりご挨拶いただいた。お話の中で「科学技術の国日本」を支えるために、ダイバーシティ、女性研究者や若手、外国人の研究者の支援が欠かせないと語られた。



2. 基調講演 「女性研究者として生きる～未来の宝箱～」

基調講演は、東京大学男女共同参画室アドバイザー都河明子氏による「女性研究者として生きる～未来の宝箱～」を行った。都河氏はご自身が理系研究者として、東京大学理学部生物科学科を卒業、その後、医学博士を取得。東京大学医科学研究所を経て、民間の外資系製薬会社を経験、東京大学理学系研究科講師、東京医科歯科大学教授を経て、平成19年度より東京大学が採択された「女性研究者支援モデル育成事業」を推進するため東京大学男女共同参画オフィス 特任教授兼コーディネーターを3年務められ、現在も、同室アドバイザーを務めている。



都河氏は香川大学とも縁があり、講演の導入に、平成18年7月に香川大学工学部石井教授が中心になって実施した女子中高生むけの理系進路選択体験講座「あなたの未来は無限大！女性技術者・科学者からのおくりもの」の取り組みについて紹介された。都河氏は女中高生むけのDVDも作成、その後も次世代育成に関して積極的に推進している。香川大学の先進的な取り組みが紹介され、講師より高く評価されたことは、今後の女性研究者支援モデル育成事業の次世代育成の事業展開にむけて、大変有意義なものとなった。

このほか基調講演では、7つの項目に基づき話された。「1. 今、なぜ女性研究者か？」では、日本の素晴らしい科学技術の発展が少子化の中で脅かされていること、その問題を妥結するためには、女性や若手の研究者の活躍が欠かせないことを確認された。なぜ女性研究者支援なのかという問いに対して、「数合わせではなく、“新しい知”と“斬新な視点”が新しい科学技術を生み出す可能性がある」という力強い論理づけをいただいた。「2. 日本の女性研究者の現状」では、女性研究者比率の国際比較を示され、世界の先進国の中で、日本の女性研究者の比率が13.0%と最下位であること、分野別で格差があること、海外に出向している女性研究者は大変活躍していること等を踏まえ、“科学技術分野における女性研究者の能力発揮”できる環境整備が求められていることが確認された。

続いて「3. 女性は理系に向いている？」では、「女性の地位向上」の理想的なモデルケース（GEP 3法則）として「Gender：女性的資質で達成する」「Empowerment：女性自身が力をつける必要」「Partnership：男性と女性が力を合わせる」の3法則を紹介。世界で活躍する女性研究者の発言とし

て、米沢富美子慶応義塾大学・名誉教授の「女性は直観力がある。しかも、妊娠・出産を経験するため、忍耐強さを持っている。これらこそ科学にとって不可欠な要素」という言葉を紹介した。そして「4. 女性研究者のための取り組み」では、「理系女性今がチャンス！」と科学技術分野における女性研究者支援策の取り組みについて紹介された。「5. 最近の企業の取り組み」では、「ポジティブ・アクションの必要性と効果」として女性が活躍でき、経営成果も良好な優良企業が業績を伸ばしており、多くの企業で多様な人材登用を行っている」と述べられ、ゴールドマン・サックス・グループが提唱した「ウーマノミクス」について解説。「1. 女性労働力率引上げは少子高齢化への回答 2. 女性労働力の上昇⇒日本の潜在成長率向上のカギ（押しあげる効果） 3. 女性の資金力向上は消費と投資の分野で台頭する」という分析を紹介された。

まとめとして「6. 東大・男女共同参画オフィスの取組み」として「女性研究者白書」の作成や戦略的な取り組みとして行った研究者のキャリア支援について紹介された。学内で理解を広げるために各部署長に出向き、国際的なデータに基づきポジティブ・アクションのシステムを構築されたことを話され、総長裁量ポストを利用した、東大初の女性に特化した教員公募についても紹介された。4 キャンパスの保育園設置は福利厚生ではなくインフラ整備。両立支援・研究継続のための戦略的システム構築であること、総合的な取り組みによって、女性研究者が結果的に倍増したことが報告された。「7. 最後に（まとめ）」として、黄金の3割という「カウンター理論」を紹介、組織を活性化させるにはその組織のマイノリティ（少数派）の占める割合が30%は必要であるという理論を解説し終了された。

3. ポスターセッション

香川県県民活動・男女共同参画課 東海大学 島根大学
奈良先端科学技術大学院大学 宮崎大学 山形大学
東京医科歯科大学 愛媛大学 岡山大学 広島大学
徳島大学 香川大学(12 団体が参加)



4. パネルディスカッション「四国で女性研究者を育む～大学における女性参画のビジョンを語る」

○パネリスト

本仲純子（徳島大学AWAサポートセンター長特任教授）
秋田美子（鳴門教育大学 大学院学校教育研究科准教授）
小島秀子（愛媛大学女性未来育成センター長教授）
森田美佐（高知大学 人文社会科学系教育学部門准教授）
関 泰子（四国学院大学 社会学部教授）

○コメンテーター

板倉周一郎

（文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課長）

○コーディネーター 一井眞比古（香川大学学長）



徳島・鳴門教育大学・愛媛大学・高知大学、そして私立大学の四国学院大学はじめ、文部科学省の板倉課長をお招きし、「四国で女性研究者を育む～大学における女性参画のビジョンを語る」をテーマに、各大学における女性研究者の活躍ぶりやその教育研究環境の整備、ポジティブ・アクションとしての女性の積極的な採用に向けての各大学の取り組みについてパネルディスカッションを通して討議した。

昨日の国立大学学長会議では「四国内国立5大学による男女共同参画推進共同宣言」が採択され、④国の女性研究者による優れた教育研究活動の支援に努めると宣言をした。「四国で才能あふれる女性研究者を育むために今何ができるのか？何が求められているのか？」、「今一層、四国に力のある女性研究者が来て、教育機関や研究機関、企業で活躍していただくために何ができるのか？」このパネルディスカッションを通じて、ぜひ四国で女性研究者支援を進めるにあたっての「共通の地図」を持っていただけたらと願っている。

第1部「生活者としての研究者、“研究も家庭も”の視点」についての問題提起

①高知大学人文社会科学系教育学部門 森田美佐准教授「大学の女性参画を男性と共に」



家政学、家族関係学と生活経営学が専門。家庭生活を職業生活の関係を研究している。日本では家庭の仕事が男女でアンバランス。「土日や夜も仕事が入り、家庭の仕事に取り組んでいけない」と男性は言われる。これは女性も同じだ。研究者は生活があること、生活があることが前提とされていない。子育てや遠距離介護をしている男性研究者の話を見ると、家庭や生活があることを前提とした研究環境がない。ここを整えることで、女性研究者の研究成果も高まっていくのではないかと。

②四国学院大学社会学部 関泰子教授「フィールドワーク系女性研究者の可能性：タイとの比較から」



タイなど東南アジアは女性がとても働く。日本の女性が怠惰だというわけではなく、タイは女性が育児期に仕事を辞めない。一言でいうならそういう文化。年齢別女子労働力率が日本はM字型となり、子育て期に仕事を辞める。女性の研究者は「ライフコース」を見直した方がいい。高学歴女性は、一度仕事を辞めると仕事に戻らない、再就職しない。研究とは専門生の高い仕事なので、日本の女性はスーパーウーマンを期待されている。男性にも課せられることだが優先順位を付けることも必要なのではないかと。

③徳島大学AWAサポートセンター本仲純子特任教授「徳島大学AWA(OUR)サポートシステム」



徳島大の現状は女性 16.8%、教授 6.8%（18名）、30～44歳の在職女性研究者比率が激減している。振興調整費の採択で子育て世代の女性研究者の底上げを図る。学長裁量女性研究者プロジェクトによる研究支援、ワークライフバランスを図る各種ベビーサポートを計画。上位ポストの確保と女性研究者比率20%を目指す。特に女性准教授・講師層が力をつけるしくみを構築し、将来、上位職を狙える実績と見識を備えた女性研究者の増加を期待している。

フロア1：採用の段階で、男女を分けずに採用して欲しいのに、分野によっては男性の制限をかけていたりする。採用の道が見えないと希望が持てない。

フロア2：人文系、社会学系的女性研究者への支援の取り組みはどうか。人数は多いが同じ問題を抱える。

第2部「女性研究者を増やす、目標値を定めた積極的な採用と次世代の育成」

④香川大学学長一井眞比古「香大発、地域ぐるみ女性研究者の高波を」



くるみんの取得から始まった女性への取り組み。理系女性研究者の比率19%めざし、ジェンダーバランスに配慮した採用促進している。社会福祉士の資格を持つコーディネーターの配置しセーフティネットを整備した。支援の取り組みの展開として研究補助者の配置現在11名の女性研究者に配置し、科研費の獲得、採択率の向上を目指す。両立支援にむけて学生ボランティアを組織。次世代育成に向けた女子学生と卒業生の交流も実施。相談環境の充実。自然科学系的女性学生の大学院進学の向上へ向けた情報提供を行う。四国地域・香川県内の他大学との連携として、共同宣言、第1回女性研究者フォーラム、ジェンダーに関する統計調査を実施。四国の女性研究者むけSNSを立ち上げた。情報交換の場にしてほしい。

くるみんの取得から始まった女性への取り組み。理系女性研究者の比率19%めざし、ジェンダーバランスに配慮した採用促進している。社会福祉士の資格を持つコーディネーターの配置しセーフティネットを整備した。支援の取り組みの展開として研究補助者の配置現在11名の女性研究者に配置し、科研費の獲得、採択率の向上を目指す。両立支援にむけて学生ボランティアを組織。次世代育成に向けた女子学生と卒業生の交流も実施。相談環境の充実。自然科学系的女性学生の大学院進学の向上へ向けた情報提供を行う。四国地域・香川県内の他大学との連携として、共同宣言、第1回女性研究者フォーラム、ジェンダーに関する統計調査を実施。四国の女性研究者むけSNSを立ち上げた。情報交換の場にしてほしい。

⑤鳴門教育大学大学院学校教育研究科秋田美代准教授「キャリア形成と次世代の育成」



教員をしてきた自分が今は研究者。教員研修として大学院に行き、研究の魅力に気づいた。キャリア形成には周りの適切な指導が必要。修士、博士課程の時、大学の研究者になった時、歩むべき経路と目指すべき道筋についてのアドバイスが有益。次世代の育成について、短期、中期、長期的な目標そのためには何を実現することが必要か明確にすることが大事。「失敗しそうなことは最初から挑戦しない」若者の傾向があるが、子どもが成長する中で、自分で意思決定をさせたり、自分の行動の成功あるいは失敗の原因を自己省察させたりする経験を増やしていくことが重要。

⑥愛媛大学女性未来育成センター長 小島秀子教授「愛媛大学の女性研究者育成プロジェクト」



自分は第一線の女性科学者としてやってきた。後進のためにそろそろいいじゃないと言われ、女性研究者の取り組みを始めた。支援ではなくあくまで育成。愛媛大学は学生が1万人で女子学生は40%、女子教員は12%。工学、農学部では10人。工学部では教員150人中女性は3人だけ。とにかく女性教員を増やす。中期目標では2020年までに全学で20%にする。理工農部局については15%へ拡大を目指す。女性を採用すると、その年額給与の半額をその当該学科に付与する「愛大式ポジティブ・アクション1プラス0.5」は学長の裁量の全学経費で賄われている。事業終了時の3年後には全学で14%、理工農で8%に増やす。

フロア都河：JST 女子中高生進学推進の立場として、秋田さんは数学の先生。「理工系に進むには数学がネックだ」と言われる。どうすれば、女性が数学を楽しく学べるか研究してほしい。

*会場の徳島大学 香川 征学長と高知大学桜井克年副学長からもコメントをいただいた。

まとめ コメンテーター 文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課 板倉周一郎課長

文化を乗り越えるには、インパクトのあることをしなければいけない。女性研究者支援について、もっと構造的な検討、対処が必要ではないか。多くは「精神的なものに基づくもの」と、「そうではないもの」に分けられるのでは。精神的なものは、周囲の偏見、女性側の特有の問題（引込み思案）。もう一つは、女性の出産育児の問題、男女共通の問題、ワークバランス、介護の問題。原因を精緻に分析しないとイケないのではないか。ポジティブ・アクションはツールであって目的ではない。女性がフルに能力を発揮して、発展していくことが本当の姿。多様な主体が共同で研究することの効果。大学で研究、議論して欲しい。

5. 閉会

来年度開催の愛媛大学からご挨拶をいただき、閉会の挨拶として、高木健一郎室長が第1回四国女性研究者フォーラムを契機に、女性研究者の発展を願い閉会とした。



ランチ交流会

フォーラム開催前の11:40~「ALICE in TAKAMATSU」を会場に開催。37名(学内12名 学外25名)参加され、各機関の方と情報交流を行った。参加者には大変好評であった。

